

看護ケアの質向上に向けたアクション・リサーチによる  
介入 —療養型病床群における看護業務改善を通して—

○細川満子<sup>1)</sup>，石鍋圭子<sup>1)</sup>

1) 青森県立保健大学

【目的】本研究の目的は、新たな病院機構の対応に向けて看護の質向上をめざす臨床現場に、アクション・リサーチの一つであるソフトシステムズ方法論（Soft Systems Methodology；以下 SSM と略す）を活用し、看護職員のケアに対する認識と行動の変化を触発することである。

【研究方法】1. 研究参加者：A 県下の療養型病床群に勤務する看護職員 12 名。2. ワークショップの設定：業務改善のワークショップに SSM のプロセスを用いた。ワークショップは「私たちのめざす新しい看護とは」という命題に基づき進行した。3. 実施期間：2004 年 5 月～7 月。ワークショップの開催回数は 8 回、その間に SSM の 7Stage を 2cycle 実施した。4. データの分析：データはワークショップの経過の中で作成された資料とし、それをもとに SSM のプロセスを再現し、ラーニングを抽出した。資料の使用については研究参加者個人に研究の主旨を文書・口頭で説明し、同意を得た。

【結果および考察】SSM の活動を通して、患者は地域の生活者であり、M 病院は一定期間の入院治療を経て【地域へ移行するための通過点】であるというラーニングが示された。退院後、患者が地域で自立した生活を送るためには患者と家族の関係性を維持することが重要であり、研究参加者の経験知を通して【家族を巻き込まないと、という自覚】が高まった。また【病院の方針を家族に明示する】ことの必要性を認識し、入院時オリエンテーションの見直しをするなどの行動に発展した。入院すれば最期までケアするという一病院完結型のサービス提供体制から、患者の生活を地域におき地域包括ケア体制の中で看護師の役割を考えるようになり、行動が変化したことが明らかとなった。患者ケアに関するラーニングとして【個別ケア計画の必要性】や【生活の中にリハビリテーションを】があげられ、「寝かせきりのケアから起こすケアへ」、「看護職と介護スタッフが連携して業務を遂行するために関係性を見直すこと」の 2 点が自分たちの抱えている根本的な問題として特定できた。SSM の活動を通して看護職自らが臨床現場の問題を認識し、看護行動の変容へとエンパワメントされた。本研究は限られた期間の結論であり、業務改善の意欲と行動の可能性は高まったが、今後も SSM を活用しその推移を確認することが必要である。